

平成 10 年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

宮長竹ヶ鼻遺跡
古海遺跡
立川遺跡
覺寺第2遺跡
宇倍野山古墳群
桂見遺跡群

平成十年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

一九九九

1999

鳥取市教育委員会

鳥取市教育委員会

序 文

鳥取市は海・山・大砂丘など豊かな自然環境に恵まれた山陰東部の中核都市として発展してまいりました。現在市内には数多くの遺跡が知られておりますが、全国的な近年の各種開発事業の増加とともにその取り扱いが重要課題となっております。もともと埋蔵文化財は、先人の生活を知る上で欠くべからざるものと言われてまいりましたが、特に環日本海交流が叫ばれる今日、先人の知恵・交流を窺い知ることは、これから的生活・交流等に必ずや役立つ市民の貴重な財産となりましょう。このような認識のもと鳥取市教育委員会では、開発と文化財の共存を図るべく各種関係機関の指導を得るとともに市民の皆様の深いご理解をいただきながら、埋蔵文化財調査事業を進めております。

さて、ここに報告します宮長竹ヶ鼻遺跡、古海遺跡、立川遺跡、覚寺第2遺跡、宇倍野山古墳群、桂見遺跡群の発掘調査事業も地権者の方々をはじめとする関係各位のご協力によって、無事所期の目的を果たし、大きな成果を得て報告書刊行のはこびとなりました。

ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様ならびに関係の皆様のご利用に供していただければ幸いです。

平成11年3月

鳥取市教育委員会

教育長 米澤秀介

例　　言

1. 本書は、平成10年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は宮長竹ヶ鼻遺跡、古海遺跡、立川遺跡、覚寺第2遺跡、宇倍野山古墳群、桂見遺跡群である。
3. 本書に用いた方位は磁北を示す。また、レベル（H）は海拔標高であるがいくつかのトレンチについては任意のレベルを用いている。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地調査から本書の作成にあたっては、多くの方々から指導・助言ならびに協力をいただいた。厚く感謝いたします。
6. 発掘調査の体制は次のとおりである。

発掘調査主体　　鳥取市教育委員会

事務局　　鳥取市教育委員会文化課

調査員　　稻浜隆志・平川　誠・前田　均・山田真宏

本文目次

序文
例言
目次

I.はじめに	
1. 発掘調査の契機と調査の目的	1
2. 発掘調査の経過	1
II. 宮長竹ヶ鼻遺跡	
1. 遺跡の位置と環境	3
2. 発掘調査の概要	4
III. 古海遺跡	
1. 遺跡の位置と環境	5
2. 発掘調査の概要	5
IV. 立川遺跡	
1. 遺跡の位置と環境	11
2. 発掘調査の概要	11
V. 覚寺第2遺跡	
1. 遺跡の位置と環境	13
2. 発掘調査の概要	13
VI. 宇倍野山古墳群	
1. 遺跡の位置と環境	15
2. 発掘調査の概要	15
VII. 佐見遺跡群	
1. 遺跡の位置と環境	15
2. 発掘調査の概要	15
VIII. おわりに	22

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺遺跡分布図	2
第2図	宮長竹ヶ鼻遺跡トレンチ配置図	3
第3図	宮長竹ヶ鼻遺跡トレンチ1実測図	3
第4図	宮長竹ヶ鼻遺跡 トレンチ1出土遺物実測図	4
第5図	宮長竹ヶ鼻遺跡トレンチ2実測図	4
第6図	古海遺跡トレンチ配置図	5
第7図	古海遺跡トレンチ1実測図	6
第8図	古海遺跡トレンチ2実測図	7
第9図	古海遺跡トレンチ3実測図	7
第10図	古海遺跡トレンチ4実測図	8
第11図	古海遺跡トレンチ4出土遺物実測図	8
第12図	古海遺跡トレンチ5実測図	9
第13図	古海遺跡トレンチ5出土遺物実測図	9
第14図	古海遺跡トレンチ6実測図	9
第15図	立川遺跡トレンチ配置図	10
第16図	立川遺跡トレンチ1、2、3実測図	10
第17図	立川遺跡トレンチ4実測図	11
第18図	立川遺跡トレンチ5実測図	11
第19図	覚寺第2遺跡トレンチ配置図	12
第20図	覚寺第2遺跡トレンチ1実測図	12
第21図	覚寺第2遺跡トレンチ2実測図	13
第22図	宇倍野山古墳群トレンチ配置図	14
第23図	宇倍野山古墳群トレンチ1、2実測図	14
第24図	桂見遺跡群トレンチ配置図	15
第25図	桂見遺跡群トレンチ1、2実測図	16
第26図	桂見遺跡群トレンチ3、4、5実測図	17
第27図	桂見遺跡群 トレンチ6、7、8、9、10実測図	18
第28図	桂見遺跡群 トレンチ11、12、13、14実測図	19
第29図	桂見遺跡群トレンチ15、16実測図	20
第30図	桂見遺跡群トレンチ16出土遺物実測図	21

図 版 目 次

図版1	1. 宮長竹ヶ鼻遺跡 調査地近景(東から) 2. 同 トレンチ1(西から) 3. 同 トレンチ2(南から) 4. 古海遺跡 調査地近景(西から) 5. 同 トレンチ1 第2遺構面(北北西から) 6. 同 トレンチ2(南南西から) 7. 同 トレンチ3 遺構面(西北西から) 8. 同 トレンチ4 遺構面(北北東から)	
図版2	1. 古海遺跡 トレンチ4掘り下げ後 (北北東から) 2. 同 トレンチ5包含層遺物出土状況 (南東から) 3. 同 トレンチ6 第2遺構面(北東から) 4. 立川遺跡 調査地近景(東から) 5. 同 トレンチ1(北から) 6. 同 トレンチ2(北東から) 7. 同 トレンチ3(東から) 8. 同 トレンチ4(東から)	
図版3	1. 立川遺跡 トレンチ5(南から) 2. 覚寺第2遺跡 調査地遠景(南西から) 3. 同 トレンチ1(北東から)	
図版4	1. 桂見遺跡群 トレンチ1(北東から) 2. 同 トレンチ2(東から) 3. 同 トレンチ3(北西から) 4. 同 トレンチ4(南西から) 5. 同 トレンチ5(北から) 6. 同 トレンチ6(北東から) 7. 同 トレンチ7(東から) 8. 同 トレンチ8(東から)	
図版5	1. 桂見遺跡群 トレンチ9(北東から) 2. 同 トレンチ10(南西から) 3. 同 トレンチ11(東から) 4. 同 トレンチ12(南西から) 5. 同 トレンチ13(東から) 6. 同 トレンチ14(西から) 7. 同 トレンチ15(北西から) 8. 同 トレンチ16(北西から)	

I はじめに

1. 発掘調査の契機と調査の目的

鳥取市は、鳥取県の東部に位置し面積239万m²、人口14万7千人を擁する山陰の中核都市である。県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担っている。北方には鳥取砂丘そして日本海が広がり、市の中央部を南から北へと千代川が流れている。市域の中心部は、千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占めており、平野の周辺部は丘陵地となっている。近年まで平野部は主として水田として利用され、丘陵地では梨を中心とする果樹栽培が行われてきた。しかし、近年は企業進出による工業用地や住宅団地の造成等によって土地利用の変化が激しい。

肥沃な鳥取平野は、原始・古代から重要な牛畜基盤として人々の生活を支えると共に交通の要所としても重要な位置を占め、政治、経済、文化の中心として、現在に至っている。このように恵まれた地理条件を背景に鳥取市内には、数多くの遺跡が残されている。遺跡は各時代にわたり、これまでの遺跡分布調査によって、二千ヶ所を超える古墳・遺物散布地等が確認されている。このため各種開発事業との調整が必要となる遺跡も近年増加の一途をたどっている。

今回報告する宮長竹ヶ鼻遺跡、古海遺跡、立川遺跡、覚寺第2遺跡、宇倍野山古墳群、桂見遺跡群もそれぞれ流通関連施設建設、店舗建設、河川改修および県道拡幅、病院施設建設、農道建設、市道建設の開発事業が計画され事前に協議を受けたものである。それぞれの遺跡とも、開発との円滑な調整に必要な具体的な資料を得ることを目的として発掘を実施した。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は、各調査区とともにトレチ掘削による遺構および遺物の包含層の確認に主眼をおいて、宮長竹ヶ鼻遺跡から着手し、その後古海遺跡、立川遺跡、覚寺第2遺跡、宇倍野山古墳群、桂見遺跡群と順次実施した。なお、立川遺跡については、開発事業の別により二回に期間を分けて調査を実施した。

宮長竹ヶ鼻遺跡は平成10年4月14日から4月17日まで、設定した2本のトレチについて調査を行なった。調査面積は53.84m²である。

古海遺跡は開発事業主の別により、A地区とB地区に分けて調査を実施した。A地区は平成10年5月27日から6月26日まで、設定した2本のトレチについて調査を行なった。調査面積は52.04m²である。B地区は平成10年6月3日から6月26日まで、設定した4本のトレチについて調査を行なった。調査面積は58.22m²である。

立川遺跡は開発事業の別により時期を分けて、平成10年7月2日に設定した2本のトレチについて、平成10年10月12日から10月16日まで設定した3本のトレチについて、計5本のトレチの調査を行なった。調査面積は39.39m²である。

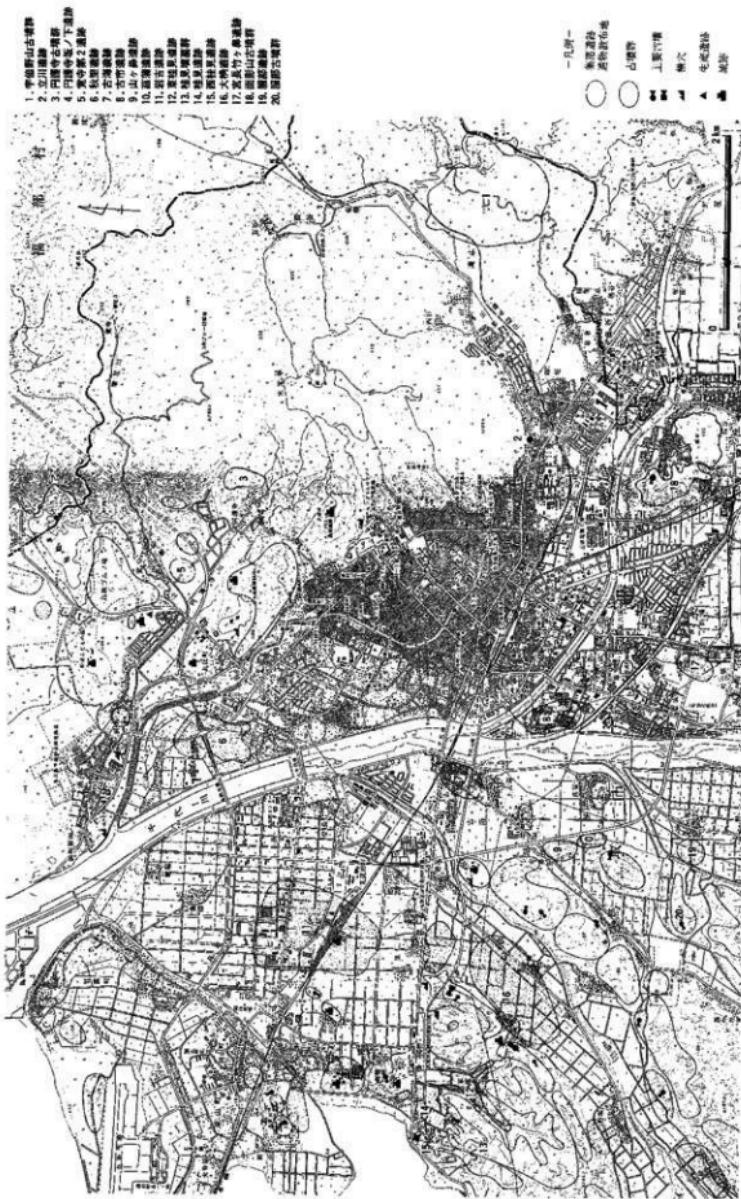
覚寺第2遺跡は平成10年9月8日から9月11日まで、設定した2本のトレチについて調査を行なった。調査面積は64.52m²である。

宇倍野山古墳群は平成10年9月24日から9月29日に、設定した2本のトレチについて調査を行なった。調査面積は11.67m²である。

桂見遺跡群は平成10年10月30日から12月17日に、設定した16本のトレチについて調査を行なった。調査面積は183.73m²である。

以上6遺跡の調査面積の総計は463.41m²となる。なお、トレチは壁面崩壊を防ぐため、段掘りにするなどの配慮をした。このため掲載した断面図については、同一方向の壁面を合成したものもある。出土遺物、記録類の整理作業、報告書作成については現地調査時に着手、調査終了後まで実施した。

第1図 調査地周辺道路分布図



II 宮長竹ヶ鼻遺跡

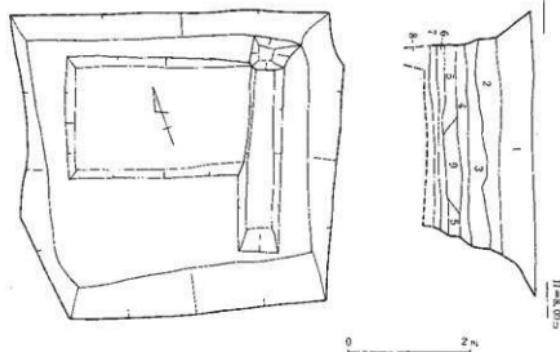
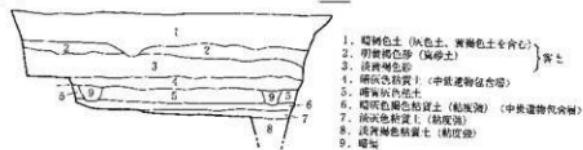
1. 遺跡の位置と環境

宮長竹ヶ鼻遺跡は鳥取市宮長地内に所在する。JR鳥取駅の南約2kmの位置にあり、北方約100mには大路川、東方約500mには千代川が流れている。遺跡西方の低地は千代川の旧流路にあたり、遺跡は旧千代川右岸の自然堤防上の微高地に営まれている。



第2図 宮長竹ヶ鼻遺跡トレーンチ配置図

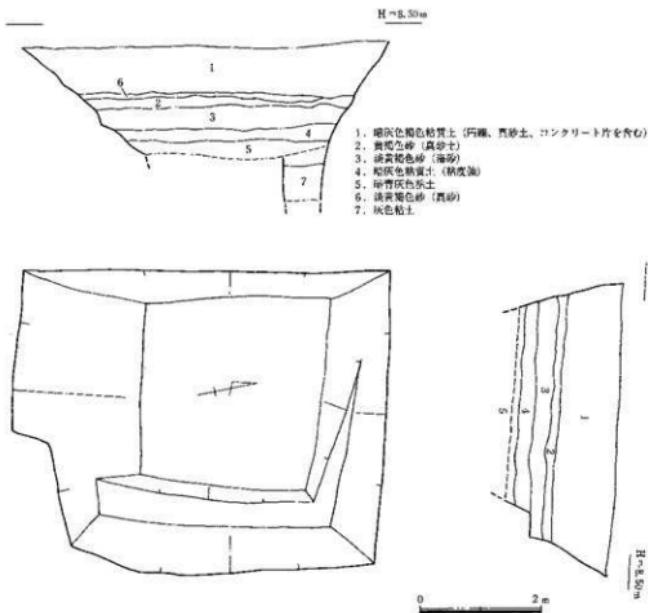
11-8.00m



第3図 宮長竹ヶ鼻遺跡トレーンチ1実測図



第4図 宮長竹ヶ鼻遺跡トレンチ1出土遺物実測図



第5図 宮長竹ヶ鼻遺跡トレンチ2実測図

宮長竹ヶ鼻遺跡では、平成5年に道路建設に伴う発掘調査が行われており、古墳時代から中世にかけての遺構、遺物が検出されている。

2. 発掘調査の概要

調査対象地は、以前民間企業の運動場として整地された場所で、客土によって地表面の標高は周囲の水田面より50mから1mほど高い。対象地の北東部と南西部に計2本のトレンチを設定した。

トレンチ1

対象地内の北東部に設定した5.1m×4.9mのトレンチである。調査前の標高は7.8mである。調査の結果、第1層から第3層まで地表から約1mは客土である。その下位にあたる第4層からは土師器、須恵器、瓦質土器、白磁が、第6層からは瓦質の土鍋が出土しているが、いずれも小片である。これらの遺物のうち両層から1点ずつを図化した。

トレンチ2

対象地内の南西部に設定した $5.77\text{m} \times 5.0\text{m}$ のトレンチである。調査前の標高は8.2mである。地表下約1.5m（第1、4、6層）は客土であり、それ以下の土層で造構、遺物は検出されなかった。

III 古海遺跡

1. 遺跡の位置と環境

古海遺跡は、鳥取市古海地内に所在し、JR鳥取駅の西約2km、千代川西岸に位置する遺跡である。主要地方道鳥取・鹿野・倉吉線建設に伴う調査として、昭和54年、55年度に発掘調査が行われている。この調査により、縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。造構としては弥生時代から中世にかけての掘立柱建物跡、井戸、溝状造構、土坑を検出している。

2. 発掘調査の概要

調査対象地は、主要地方道鳥取・鹿野・倉吉線の南側で、ほぼ中央に北東-南西方向に県道古海高路線が走る。発掘調査は県道古海高路線の東側（A地区）にトレンチ2本、西側（B地区）にトレンチ4本の計6本を設定した。トレンチを設定したのは、いずれも水田である。

トレンチ1（A地区）

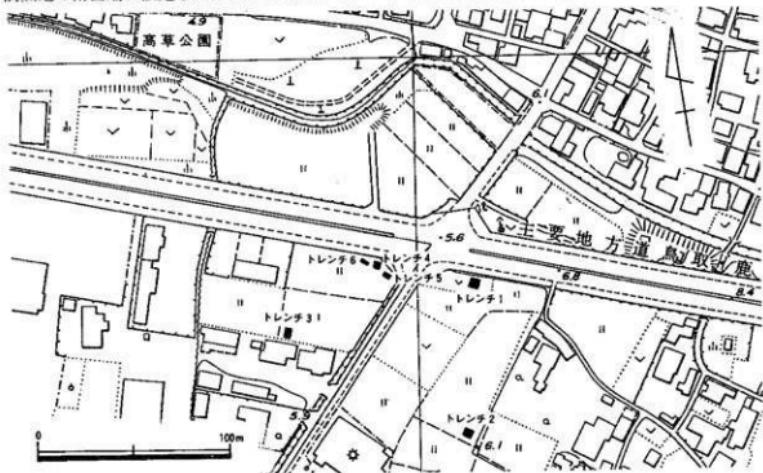
調査地の北東寄りに設定した $5.2\text{m} \times 5.2\text{m}$ のトレンチである。現地表面の標高は5.75mである。調査により標高5.25mで、第1造構面を検出している。これはトレンチ断面土層第9層上面にあたり、この造構面では近・現代とみられる溝状造構1を検出している。第9、10層では土師器、須恵器が出土している。また標高4.9m前後では、第2造構面として、土坑1、溝状造構5、ピット7を検出している。この造構面で検出した造構の時期は、ピット埋土中で出土した土師器、須恵器や層位を考えて古墳時代から奈良・平安期にかけての時期の中で考えておきたい。

トレンチ2（A地区）

調査地の南東端に設定した $5.0\text{m} \times 5.0\text{m}$ のトレンチである。現地表面の標高は5.3mである。調査により標高4.95~4.1mの第7~11層で、弥生土器、土師器、須恵器を検出している。造構は検出していない。

トレンチ3（B地区）

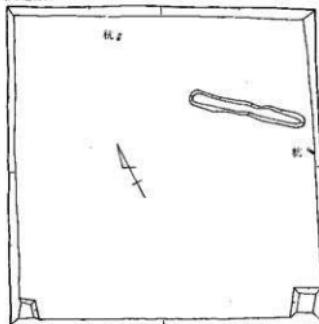
調査地の南西端に設定した $5.0\text{m} \times 4.0\text{m}$ のトレンチである。現地表面の標高は5.55mである。調査に



第6図 古海遺跡トレンチ配置図

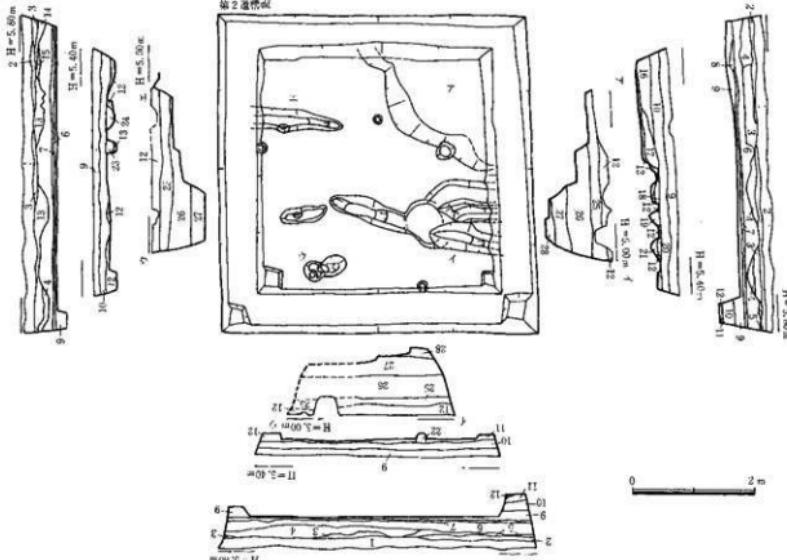
第1遺構断面

1. 褐褐色砂質シルト (堆積土)
2. 黄褐色砂質シルト (よりやや硬)
3. 黄褐色シルト
4. 褐灰色シルト (よりやや硬) [著1]
5. 褐灰色シルト (よりやや硬)
6. 褐灰色シルト (堆積土)
7. 黄褐色砂質シルト (堆積土)
8. 黄褐色シルト (よりや硬)
9. 黄褐色砂質シルト (マンガン分沁化)
10. 黄褐色砂質シルト
11. 黄褐色砂質シルト
(黄褐色砂質シルトブロック含む)
12. 黄褐色砂質シルト
13. 黄褐色砂質シルト
(よりやや硬、黄褐色シルトブロック含む)
14. 黄褐色シルトと褐灰色シルトの透合
(黄褐色シルトブロック含む)



15. 褐灰色シルト (よりや硬)
16. 黄褐色砂質シルト
17. (黄褐色砂質シルト及び黄褐色シルトブロック含む)
18. 黄褐色シルト
19. (褐灰色砂質シルトブロック含む、よりやや硬)
20. 褐灰色砂質シルト (黄褐色シルトブロック含む)
21. 黄褐色砂質シルトと褐灰色砂質シルトの混合
22. 黄褐色砂質シルト
23. (黄褐色シルトブロックをわずかに含む)
24. 褐灰色砂質シルト
25. 黄褐色砂質シルトと褐灰色砂質シルトの混合
26. 黄褐色砂質シルト
27. 黄褐色砂質シルト
(25よりりーク褐色砂質シルト)
28. 黄褐色砂質シルト (マンガン層に沈着、砂質硬度)

第2遺構断面

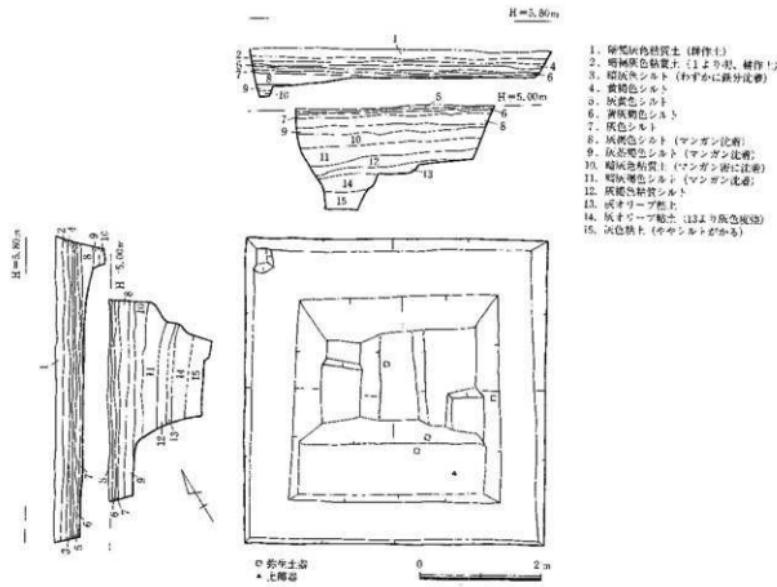


第7図 古海遺跡トレンチ1実測図

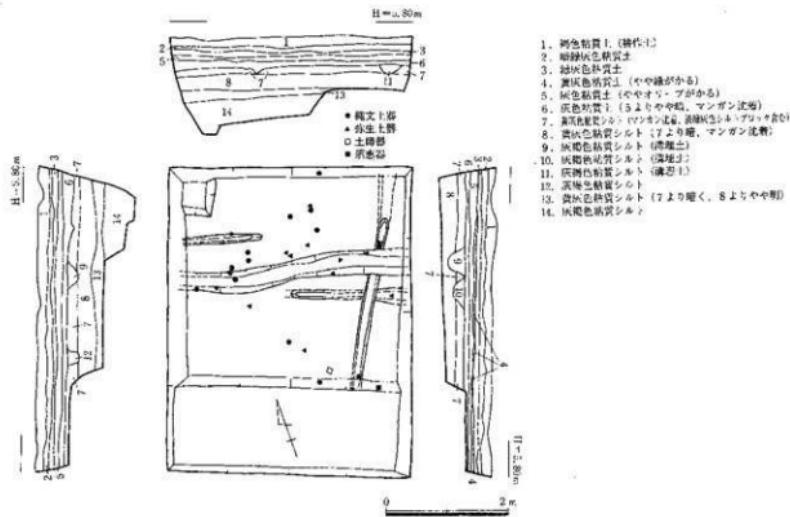
より標高5.25~5.05mの第5、6層からは縦文土器、弥生土器、土師器、須恵器を検出している。また標高5.05mの第7層上面で遺構面を検出しており、溝状遺構4を検出している。これらの遺構の時期としては、埋土中で出土した土師器、須恵器や、層序からみて古墳時代から奈良・平安期にかけての時期である。

トレンチ4 (B地区)

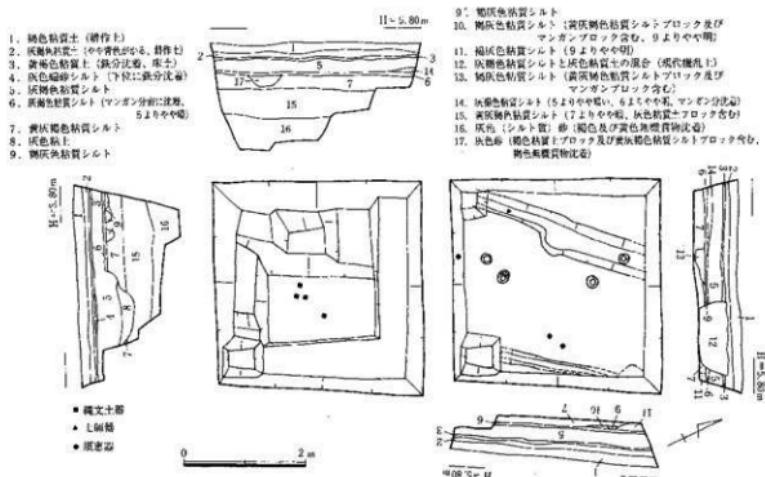
調査地の北端でトレンチ5とトレンチ6の間に設定した3.5m×3.4mのトレンチである。現地表面の標高は5.55mである。調査により標高5.3~5.05mの第5、6、14層では、土師器、須恵器が出土している。また標高5.05mの第7層上面を遺構面として、十坑1、溝状遺構4、ピット4を検出している。



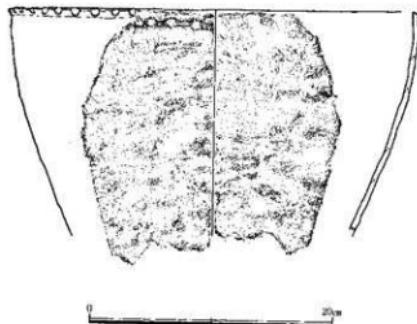
第8図 古海遺跡トレンチ2実測図



第9図 古海遺跡トレンチ3実測図



第10図 古海遺跡トレンチ4実測図

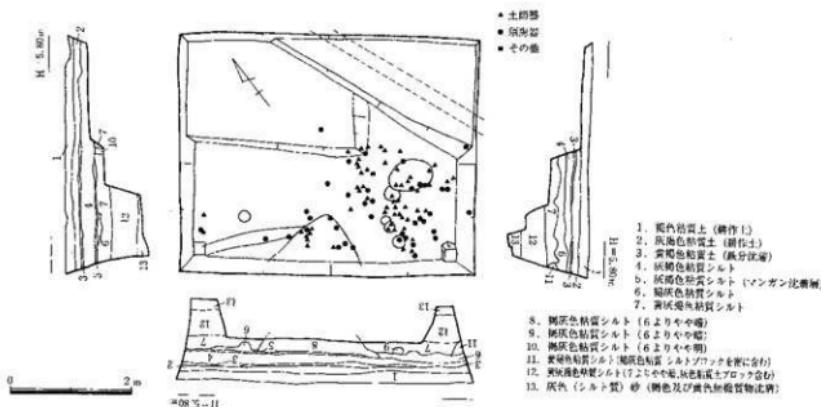


第11図 古海遺跡トレンチ4出土遺物実測図

これらの遺構の時期としては、溝状造構埋土から出土した土器片や層序からみて古墳時代から奈良・平安期にかけての時期の中で考えておきたい。この遺構面直下の現地表下0.5mから0.8m(標高5.05mから4.8m)の第7層中では縄文土器を検出している。第12図は第7層出土器で縄文時代晚期の突帯文土器である。

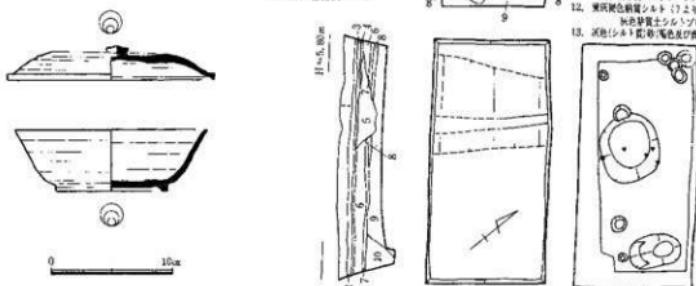
トレンチ5 (B地区)

調査地の北端でトレンチ4の南東側に設定した4.8m×3.9mのトレンチである。現地表面の標高は5.55mである。標高5.25~5.05mの第4~6層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。また標高5.05mの第6層上面を遺構面として、土坑1、溝状造構1、ピット6を検出している。これらの遺構の時期としては、土坑埋土中の土師器高杯や層序からみて古墳時代から奈良・平安期にかけ



第12図 古海遺跡トレンチ5実測図

- 1. 開灰色粘質土 (耕作土)
- 2. 深褐色粘質土 (耕作土)
- 3. 黄褐色粘質土 (耕作沈殿)
- 4. 開灰色粘質シルト
- 5. 深褐色粘質シルト (マンガン沈殿)
- 6. 開灰色粘質シルト
- 7. 開灰色粘質シルト
- 8. 開灰色粘質シルト (6よりやや厚)
- 9. 開灰色粘質シルト (6よりやや薄)
- 10. 開灰色粘質シルト (6よりやや明)
- 11. 黄褐色粘質シルト (褐色色相とシルトワッカを含む)
- 12. 黄褐色粘質シルト (7よりやや厚, 深褐色粘質シルトを含む)
- 13. 灰色 (シルト質) 砂 (開色及び黄褐色質物質充填)



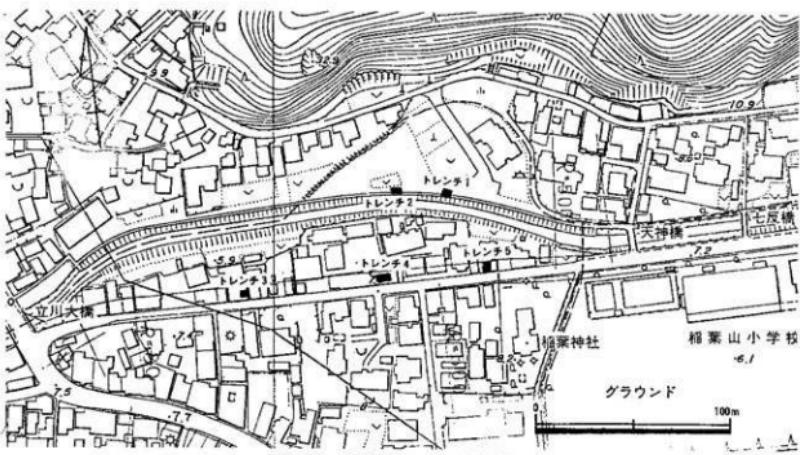
第13図 古海遺跡トレンチ5出土遺物実測図

第14図 古海遺跡トレンチ6実測図

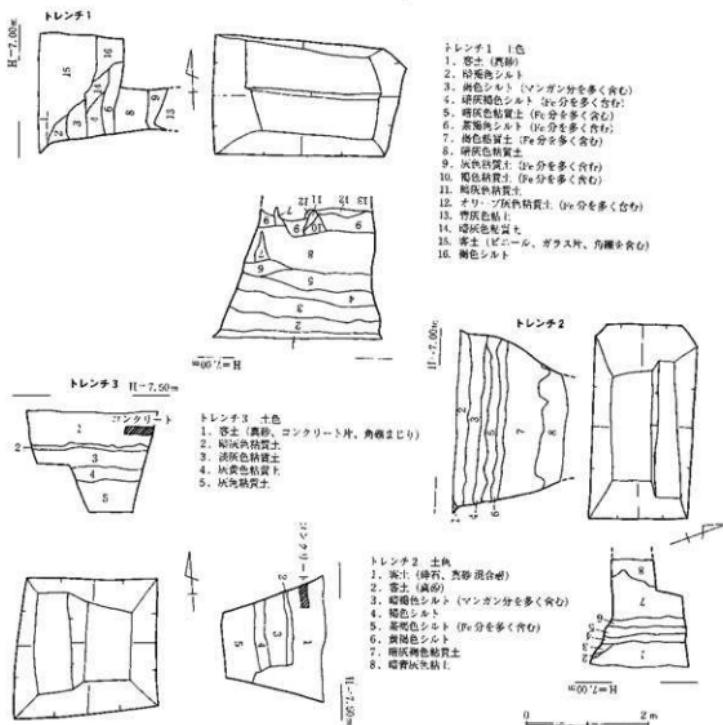
ての時期の中で考えておきたい。第13図は第6層中で出土した須恵器蓋杯である。蓋は擬宝珠様つまみが付される。蓋、杯身とも外間に回転糸切り痕がみられる。

トレンチ6 (B地区)

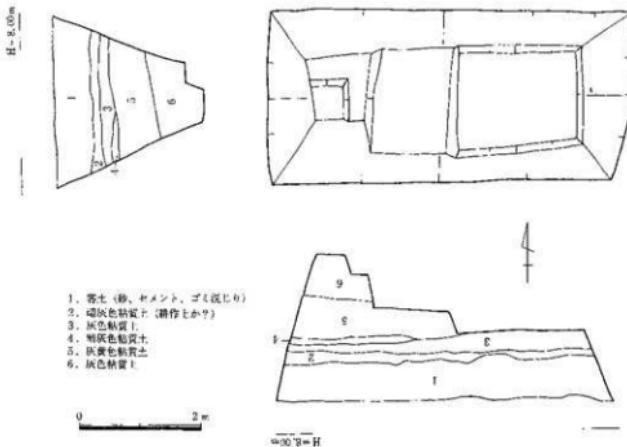
調査地の北端でトレンチ4の西側に設定した4.0m×1.9mのトレンチである。現地表面の標高は5.55mである。調査により標高5.25mで、第1遺構面を検出しているが、これはトレンチ断面土層第6層上面にあたる。この遺構面では、近・現代の遺構と考えられる溝状遺構1を検出している。また、第6層からは上師器、須恵器が出土した。標高5.05mでは第2遺構面として、土坑1、ピット9を検出している。これらの遺構の時期としては、土坑埋土中の土師器、かまと片や層位から古墳時代から奈良・平安



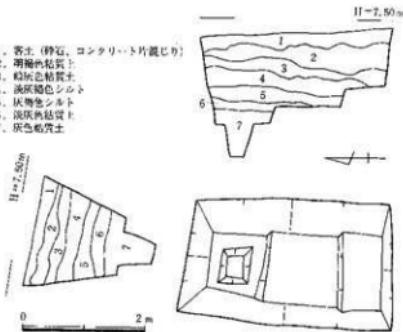
第15図 立川遺跡トレンチ配置図



第16図 立川遺跡トレンチ1、2、3実測図



第17図 立川遺跡トレンチ4実測図



第18図 立川遺跡トレンチ5実測図

期のものと考えられる。

IV 立川 遺跡

1. 遺跡の位置と環境

立川遺跡は、鳥取市立川地内に所在する。JR鳥取駅の東約2km、市内の百谷を水源とする天神川下流域で、旧袋川との合流点に近い山麓の平坦部に位置している。昭和43年に鳥取県立科学博物館学芸員（当時）亀井照人氏により、同博物館に収蔵された立川遺跡出土土器についての研究報告が行われている。また、同報告では昭和39年に立川遺跡のトレンチ調査が行われたとしている。

2. 発掘調査の概要

調査対象地は天神川を挟む南北に設定した。現況では北側にわずかに畠地が残る住宅密集地である。発掘調査はまず河川改修に伴う天神川北側土手に設定した2本にかかり、その後道路拡幅に伴う南側の

住宅立ち退き後の更地に設定した3本の計5箇所のトレンチで調査を行なった。

トレンチ1

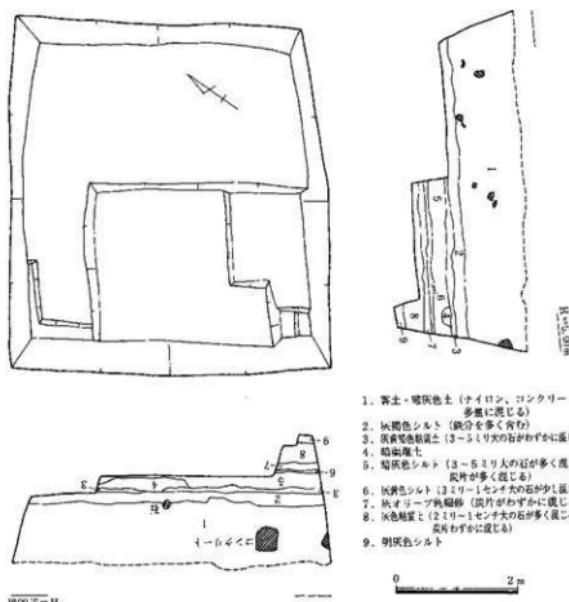
天神川北岸の調査地東寄りに設定した3m×1.96mのトレンチである。現地表面は6.7mで、南側は0.1m、北側は1m程度の客土が行われている。遺構、遺物は検出できなかった。

トレンチ2

天神川北岸の調査地西寄りに設定した3.2m×1.63mのトレンチである。現地表面は6.8mで、南側は



第19図 覚寺第2遺跡トレンチ配置図



第20図 覚寺第2遺跡トレンチ1実測図

0.15m、北側は0.4m程度の客土が行われている。遺構、遺物は検出できなかった。

トレンチ3

天神川南岸の調査地西端に設定した2.1m×2.1mのトレンチである。現地表面は7.25mで、地表下0.5mまでは客土であり、それ以下は粘質土である。遺構、遺物は検出できなかった。

トレンチ4

天神川南岸でトレンチ3とトレンチ5の中間に設定した5.7m×2.9mのトレンチである。現地表面は7.6mで、地表下0.6mまでは客土であり、それ以下は粘質土である。遺構、遺物は検出できなかった。

トレンチ5

天神川南岸の調査地東端に設定した3.5m×2.1mのトレンチである。現地表面は7.2mで、地表から0.3mまでは客土であり、それ以下はシルト、粘質土である。遺構、遺物は検出できなかった。

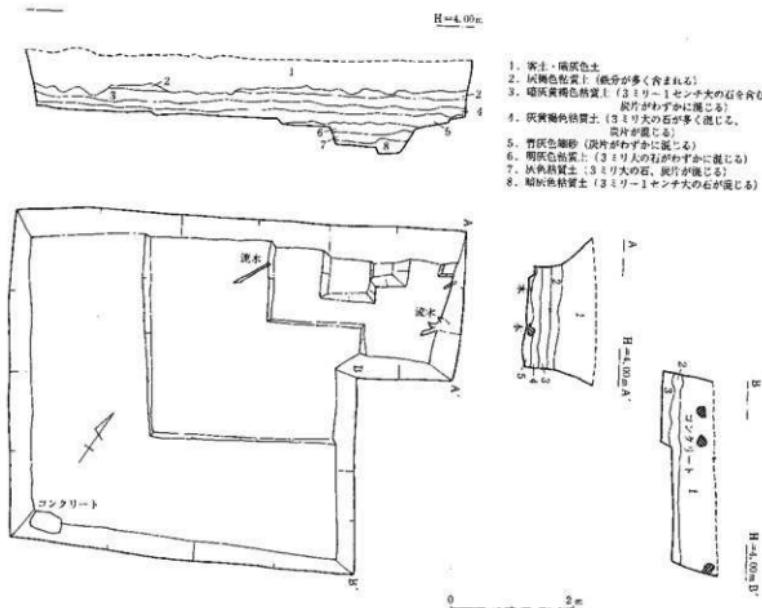
V 覚寺第2遺跡

1. 遺跡の位置と環境

覚寺第2遺跡は鳥取市覚寺地内に所在する。JR鳥取駅の北約3kmの位置で、摩尼川と円護寺川の合流点に近い水田地帯である。周辺丘陵には江戸時代には円護寺石あるいは覚寺石と呼ばれた緑色凝灰岩の石切場が残っている。平成元年には国道9号バイパス建設に伴い、遺跡東方の丘陵上に所在する覚寺7号墳～13号墳が調査された。

2. 発掘調査の概要

調査対象地は客土が行われ、周囲の水田面より2.5m前後高くなっている。対象地の東側と西側に1本ずつ、計2本のトレンチを設定して掘り下げた。客土が厚いため10m×10mで掘り出し、現地表から



第21図 覚寺第2遺跡トレンチ2実測図

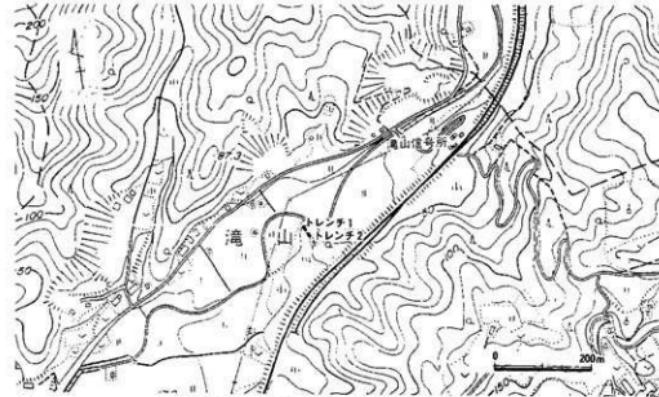
客土を約2m掘り下げた地点で、調査トレンチを設定した。

トレンチ1

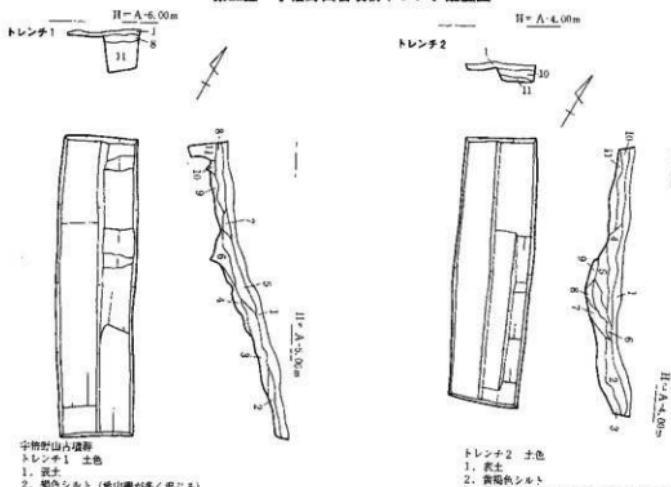
調査地の東寄りの位置に設定した5.8m×5.22mのトレンチである。標高3.6mで検出した第2層が、客土が行われる前の耕作土層と考えられる。第5層中で陶器、漆器片、板状木製品を検出した。この土層は中世期の堆積と考えておきたい。それ以下の土層では遺物は検出されず、遺構も検出されなかった。

トレンチ2

調査地の西寄りの位置に設定した(5.5m×5.5m)+(2.66m×1.5m)のトレンチである。標高3.0mで



第22図 宇倍野山古墳群トレンチ配置図



- 宇倍野山古墳群
トレンチ1 土色
1. 黄土
2. 黄褐色シルト (堆山礫が多く混じる)
3. 黄褐色シルト (堆山礫が多く混じる)
4. 黄褐色シルト (堆山礫が多く混じる)
5. 黄褐色シルト (堆山礫、灰白色多く混じる)
6. 明基褐色シルト (堆山礫が多く混じる)
7. 基褐色シルト (より堆山礫が多く混じる)
8. 暗褐色シルト (堆山礫がわずかに混じる)
9. 明褐色シルト (堆山礫が混じる)
10. 暗色シルト (より明、堆山礫が少し混じる)
11. 海色シルト (より明、10より暗、堆山礫が少し混じる)

- トレンチ2 土色
1. 黄土
2. 青褐色シルト
3. 明基褐色シルト (堆山礫の堆山礫を多く含む)
4. 明褐色シルト (灰片、堆山礫を含む)
5. 明基褐色シルト (灰片、堆山礫を含む)
6. 明青褐色シルト (灰片、堆山礫を含む)
7. 基褐色シルト (堆山礫が多く含む)
8. 暗褐色シルト (堆山礫が多く混じる)
9. 暗色シルト (堆山礫が多く混じる)
10. 暗色シルト (堆山礫が多く混じる)
11. 明褐色シルト (堆山礫が多く混じる)

第23図 宇倍野山古墳群トレンチ1、2実測図

検出した第2層が、客土が行われる前の耕作土層ないしは床土層と考えられる。第5層中で流木が出たが、それ以外遺物は検出されず、遺構も検出されなかった。

VI 宇倍野山古墳群

1. 遺跡の位置と環境

宇倍野山古墳群は、国府町と鳥取市の境に広がる稻葉山の北側丘陵上に展開する古墳群の名称である。同古墳群は鳥取市滝山・岩倉地内に広がっているが、今回の調査対象地は古墳群内でも北端に近い滝山地内である。稻葉山は因幡山・稻羽山と記されたこともあり、江戸時代には宇倍野山、上野山とも称された。同丘陵上には多くの古墳が存在することが知られ、南麓には和銅三年（710年）の紀年銘を記した骨蔵器が出土した伊福吉部徳足比売の墓がある。

2. 発掘調査の概要

調査対象地は稻葉山山塊から派生し、北西に向けてゆるやかにのびる低丘陵の先端部にあたる。調査地丘陵裾には天神川が流れ、その侵食によって調査地丘陵の北側斜面が崩落している様子が、調査前にも観察できた。稜線上には傾斜の変換とわずかな高まりがみられ、傾斜変換点2箇所にトレーニングを設定した。

トレーニング 1

調査地丘陵の稜線上先端部寄りに設定した4.9m×1.26mのトレーニングである。全体的には地表下30cm前後で地山岩盤が露出するが、トレーニング中央やや北寄りでは地山削り出しとみられる岩盤の傾斜変換が明らかであった。また、トレーニング北端部では垂直に近い岩盤の落ち込みがみられ、その位置からみて古墳の埋葬施設である可能性が高い。

トレーニング 2

調査地丘陵の稜線上尾根基部寄りに設定した4.3m×1.28mのトレーニングである。トレーニング両端では地表下30cm前後で地山岩盤が露出するが、トレーニング中央では地山削り出しとみられる岩盤の落ち込みが明らかであった。また、トレーニング断面では古墳の周溝とみられる土層変化を確認した。

VII 桂見遺跡群

1. 遺跡の位置と環境

桂見遺跡群は、鳥取市桂見地内に所在する桂見遺跡、桂見墳墓群、東桂見遺跡、西桂見遺跡、倉見古墳群から構成される遺跡群の総称である。JR鳥取駅から西へ4.5km、瀬山池の南東岸に位置する。標高100m以下の低丘陵上には墳墓が営まれ、丘陵周辺の平野部には縄文時代から中世・近世にかけての遺跡がひろがっている。

2. 発掘調査の概要

今回の調査対象地は、道路建設に伴う北西から南東にのびる約0.6kmの区間である。標高6.5m前後の平野部から、標高50m前後の丘陵地までが対象地となり、対象地内で計16本のトレーニングを設定した。

トレーニング 1 (T 1)

北東に伸びる主稜線から派生して東へ伸びる支稜線上で、微妙な傾斜変換点に、稜線に沿って設定した6.9×1mのトレーニングである。地表面の標高は45m前後である。調査の結果、遺構、遺物は検出されなかった。

トレーニング 2 (T 2)

トレーニング 1 の東側に、稜線上の平坦部に稜線に沿って設定した4.95×1mのトレーニングである。地表面の標高は43.8m前後である。調査の結果、遺構、遺物は検出されなかった。

トレーニング 3 (T 3)

トレンチ1、2の南方で、丘陵の南側裾部に設定した4.95×4.8mのトレンチである。地表面の標高は25m前後である。住居跡等の存在する可能性も考えて調査したが、結果として遺構や遺物は検出されなかった。

トレンチ4（T4）

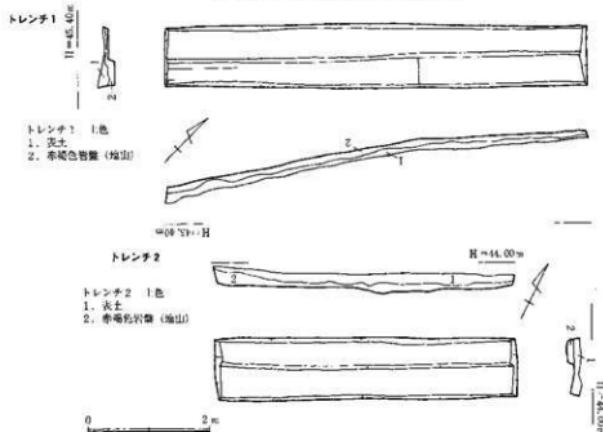
トレンチ3の南方で、北東に向けて伸びる支稜線の丘陵先端部から平坦部にかけて設定した（2.08×3m）+（7.02×2.07m）のトレンチである。地表面の標高は27.8m前後である。住居跡等の可能性を考えて調査したが、遺構や遺物は検出されなかった。

トレンチ5（T5）

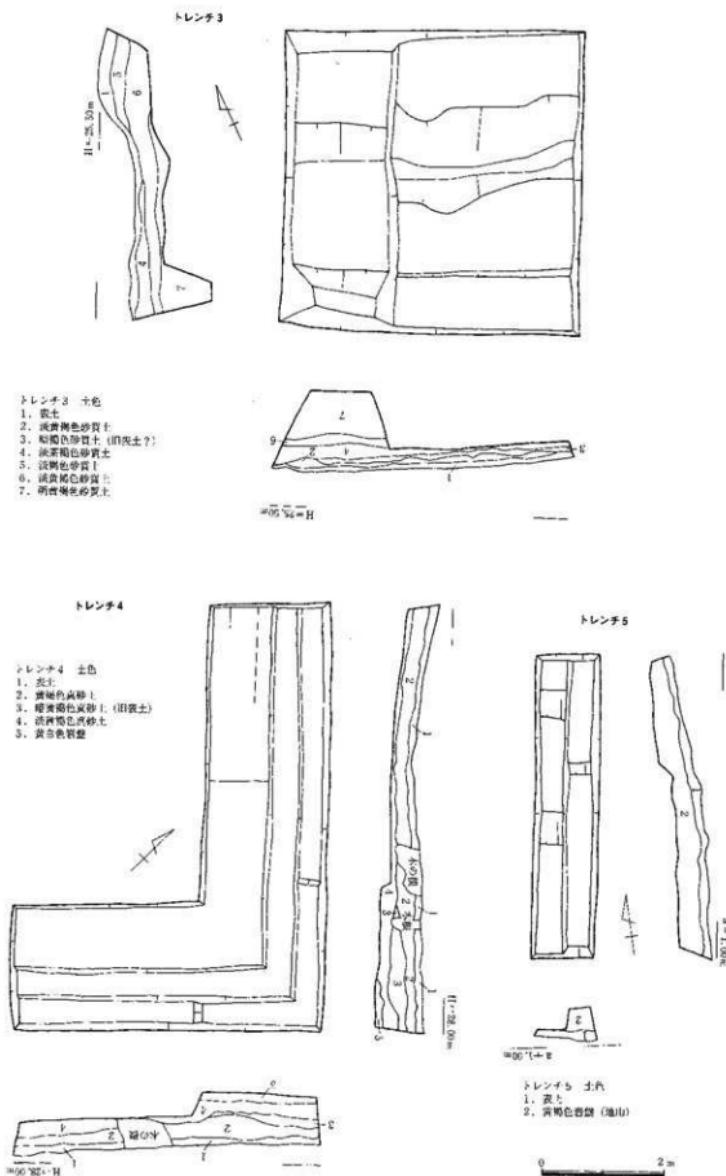
調査対象地のはば中央、今回の調査対象地では最高所となる北にのびる支稜線上に設定した5×1mのトレンチである。現況では古墳の可能性も考えられたが、調査の結果、遺構や遺物は検出されなかった。なお、実測図の標高は任意杭を基準とした。



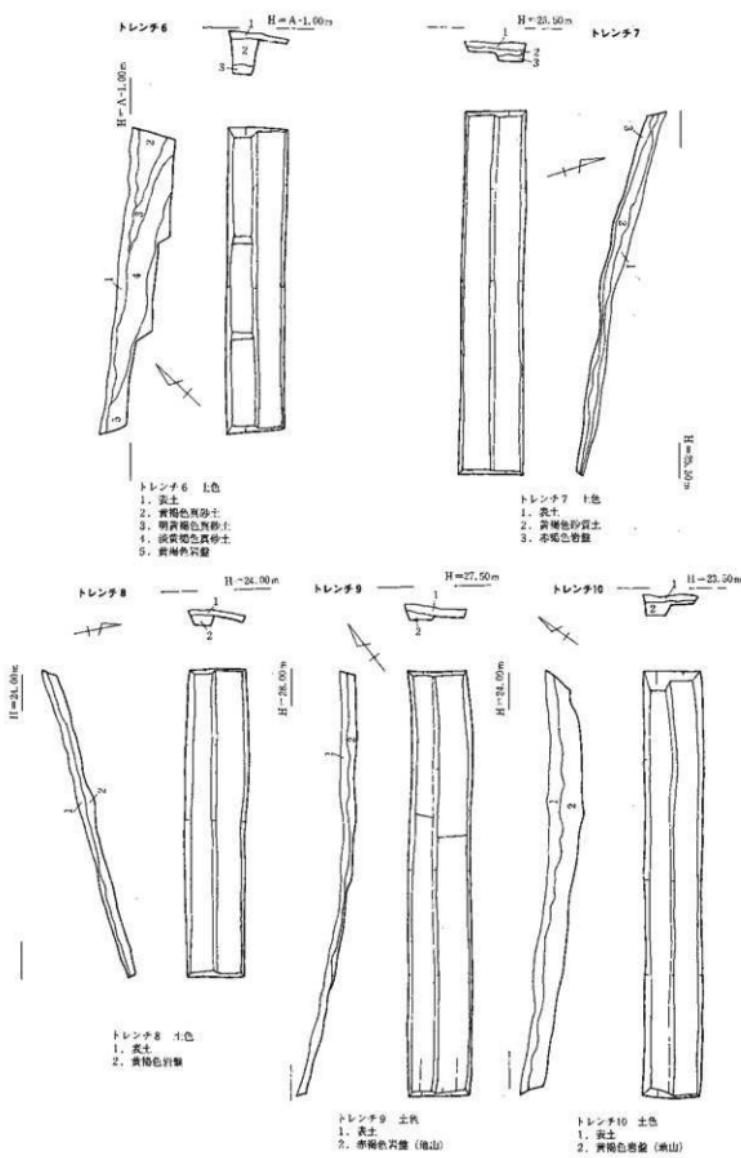
第24図 桂見遺跡群トレンチ配置図



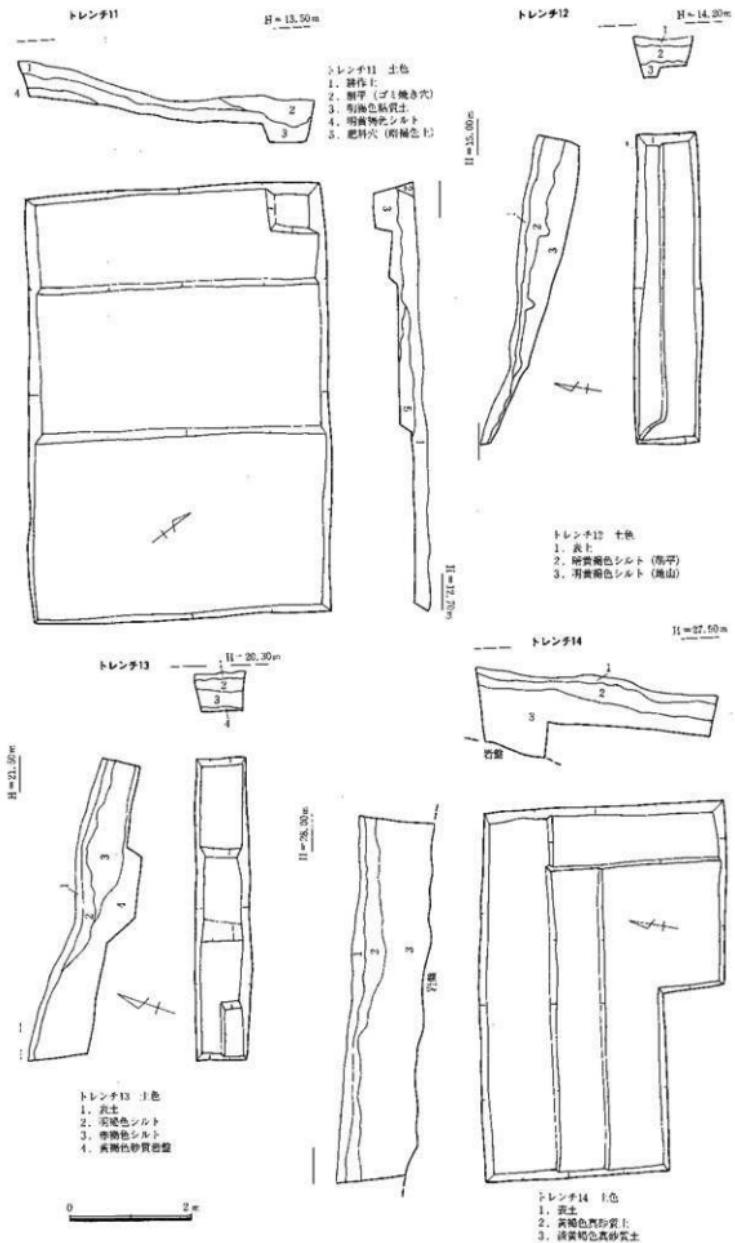
第25図 桂見遺跡群トレンチ1、2実測図



第26図 桂見遺跡群トレンチ 3、4、5 実測図



第27図 桂見遺跡群トレンチ 6、7、8、9、10実測図



第28図 桂見遺跡群トレンチ11、12、13、14実測図

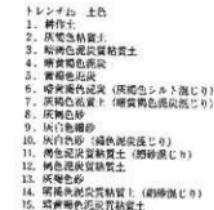
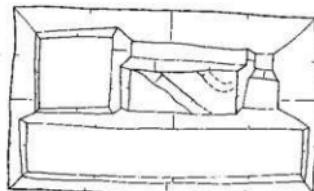
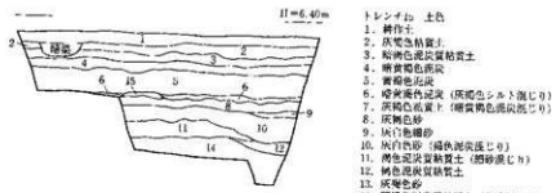
トレンチ6 (T6)

トレンチ5の北側に設定した5×0.95mのトレンチである。現況では古墳の可能性も考えられたが、調査の結果、遺構や遺物は検出されなかった。なお、実測図の標高は任意杭を基準とした。

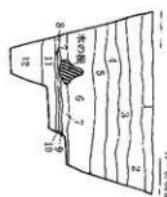
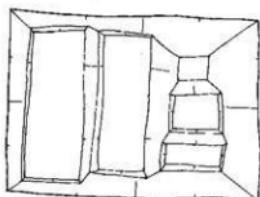
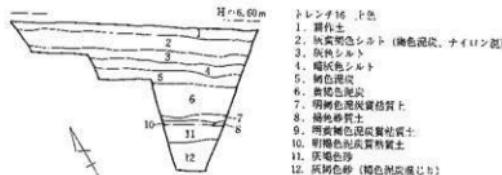
トレンチ7 (T7)

トレンチ5、6を設定した後線上で東に向けて屈曲する箇所に設定した5.92×1mのトレンチである。現況では古墳の可能性も考えられたが、調査の結果、遺構や遺物は検出されなかった。地表面の標高は25m前後である。

トレンチ15

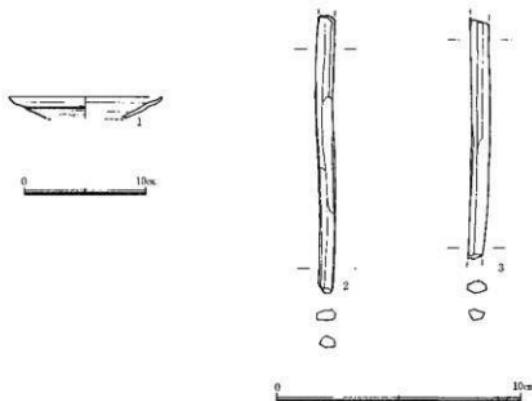


トレンチ16



0 2 m

第29図 トレンチ15、16実測図



第30図 桂見遺跡群トレンチ16出土遺物実測図

トレンチ8 (T8)

トレンチ7の東側に設定した $5.05 \times 1\text{ m}$ のトレンチである。現況では古墳の可能性も考えられたが、調査の結果、遺構や遺物は検出されなかった。地表面の標高は23.5m前後である。

トレンチ9 (T9)

北東に伸びる支稜線上の傾斜変換点に、稜線に沿って設定した $6.95 \times 1\text{ m}$ のトレンチである。地表面の標高は27.5m前後である。現況からみて古墳の可能性が考えられたが、調査の結果、表土直下に地山岩盤が露出し、地山加工や土層の変化はみられなかった。遺物は検出されなかった。

トレンチ10 (T10)

トレンチ9の北東で、稜線上の傾斜変換点に、稜線に沿って設定した $6.9 \times 0.95\text{ m}$ のトレンチである。地表面の標高は23.5m前後である。現況からみて古墳の可能性が考えられたが、調査の結果、表土直下に地山岩盤が露出し、地山加工や土層の変化はみられなかった。遺物は検出されなかった。

トレンチ11 (T11)

調査対象地の丘陵では最東端にあたる丘陵先端部の裾に、住居跡等の可能性を考えて設定した $7.1 \times 4.9\text{ m}$ のトレンチである。地表面の標高は13m前後である。現況では畑地として利用された痕跡が明瞭にみられた。調査の結果、現代のゴミ焼穴がみられた以外、遺構や遺物は検出されなかった。

トレンチ12 (T12)

トレンチ11と同一丘陵先端の稜線上に、稜線に沿って設定した $5.1 \times 1.1\text{ m}$ のトレンチである。地表面の標高は20.5m前後である。古墳の可能性も考えられたが、調査の結果、地山加工や土層の変化はみられず、遺物も検出されなかった。

トレンチ13 (T13)

トレンチ10の北東、稜線上の傾斜変換点に、稜線に沿って設定した $4.95 \times 0.9\text{ m}$ のトレンチである。地表面の標高は20.5m前後である。現況からみて古墳の可能性が考えられたが、調査の結果、遺構、遺物は検出されなかった。

トレンチ14（T14）

トレンチ1、2の南方、丘陵の南側裾部に、住居跡等の可能性を考えて設定した(6.05×3m)+(1.05×3.01m)のトレンチである。地表面の標高は27m前後である。調査の結果、地表より1m下で岩盤を確認したが、遺構や遺物は検出されなかった。

トレンチ15（T15）

調査対象地の最東端の水田面に設定した4.95×3mのトレンチで、地表面の標高は6.2m前後である。このトレンチの東側では平成8年度に市道および用水建設に伴う調査が行われ、その中で古墳時代の水田跡を検出しており、その広がりを考えて現在の水田部にトレンチを設定した。地表下1.0m(標高5.2m)で水田の小畦畔とみられる土層(第15層)を確認できた。遺物としては第8層中で、幅4cm×長さ10cm×厚さ7mm程度の板状木製品1点を検出した。

トレンチ16（T16）

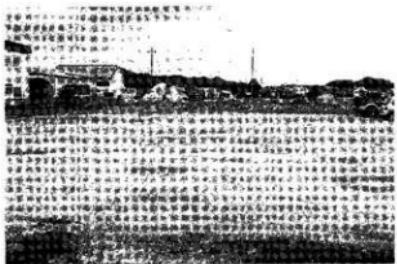
トレンチ15から約20m西方の水田面に設定した4.1×2.95mのトレンチで、地表面の標高は6.5m前後である。古墳時代の水田跡の広がりを考えてトレンチを設定した。地表下0.5m(標高5.9m)で検出した第4層では土師器皿1点、箸状木製品2点が出土した(第30図)。また、地表から1.5m下(標高5.0m)で、水田の小畦畔とみられる上層(第8層)を確認した。

VIII おわりに

1. 宮長竹ヶ鼻遺跡 北東側に設定したトレンチ1では、標高6.7m前後で須恵器、瓦質土器、白磁が、標高6.3m前後で瓦質土器が出土している。しかし双方のトレンチとも、遺構は確認できなかった。
2. 古海遺跡 トレンチ2を除く各トレンチで、標高5m前後で古墳時代から奈良・平安期にかけての時期とみられる遺構を検出している。また出土遺物は、縄文時代晚期から古代の範疇におさまる時期のものとみられるものまでがある。
3. 立川遺跡 天神川南岸に3本と北岸に2本のトレンチを設定して掘り下げたが、各トレンチとも遺物は出土せず、遺構も確認できなかった。
4. 覚寺第2遺跡 本遺跡は摩尼川と円護寺川の合流点近くに所在するという位置からみて、両河川の氾濫などの影響を少なからず受けていると考えられる。出土遺物として中世の陶器、板状木製品が出土しているが、遺構は確認できなかった。
5. 宇倍野山古墳群 従来、宇倍野山古墳群は、鳥取市東部の福葉山丘陵上の主稜線北側を中心に、標高40~200mの間に66基の所在が知られていた。今回の調査対象区は同古墳群の北西端にあたる丘陵先端部で、従来は古墳の所在は確認されていなかったが、事前の踏査により地形等から古墳の可能性が考えられた。それをうけて今回の調査が行われ、稜線上に古墳2基が所在する可能性が高いことが判明した。本報告書中ではレベルは任意点を基準にして表したが、地図上でみると標高は30~40mとみられる。
6. 桂見遺跡群 標高15~50m前後までの低丘陵の稜線上、丘陵裾にはトレンチ1~14を設定した。いずれのトレンチでも遺構、遺物とも検出できなかった。トレンチ15、16は、古墳時代の水田跡の広がりを確認するため、標高6.5m前後の水田部に設定した。調査の結果、両方のトレンチで水田跡に伴う畦畔とみられる土層を確認した。水田跡の時期を明瞭に示す遺物は出土していないが、平成8年度の調査時の結果を考慮すると、対象地内に古墳時代の水田跡が存在する可能性は高いとみられる。また、トレンチ16では中世遺物の包含層も確認している。

写 真 図 版

図版 1



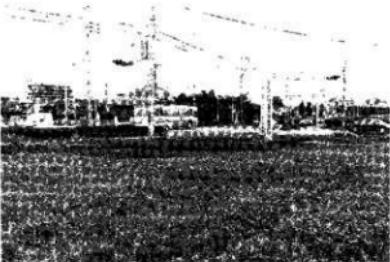
1. 宮長竹ヶ鼻遺跡 調査地近景（東から）



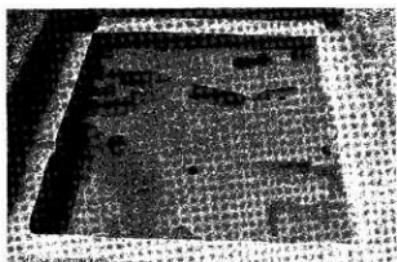
2. 同 トレンチ1（西から）



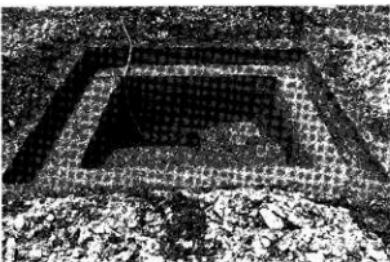
3. 同 トレンチ2（南から）



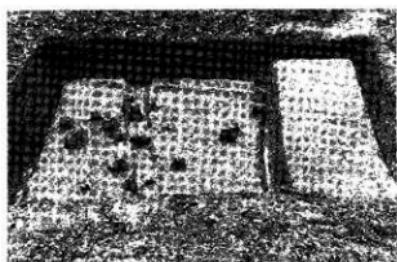
4. 古海遺跡 調査地近景（西から）



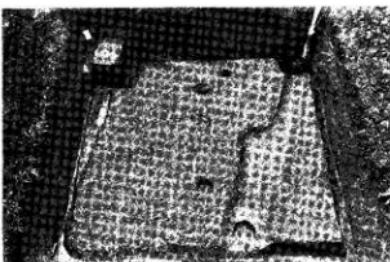
5. 同 トレンチ1第2遺構面（北北西から）



6. 同 トレンチ2（南南西から）

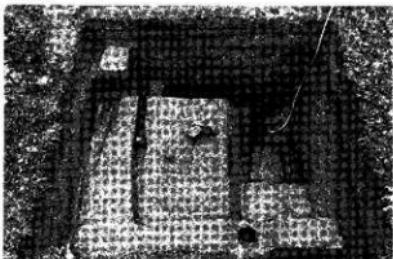


7. 同 トレンチ3遺構面（西北西から）



8. 同 トレンチ4遺構面（北北東から）

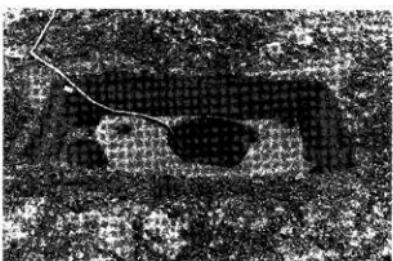
図版 2



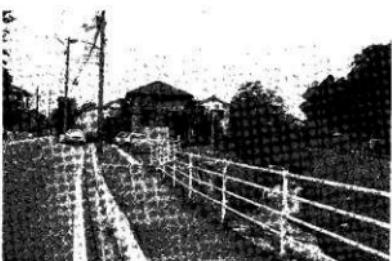
1. 古海遺跡 トレンチ4振り下げ後（北北東から）



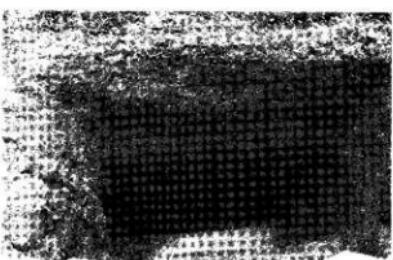
2. 同 トレンチ5包含層中遺物出土状況（南東から）



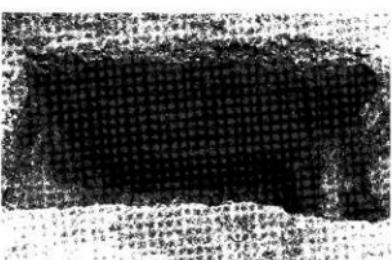
3. 同 トレンチ6第2達柵面（北東から）



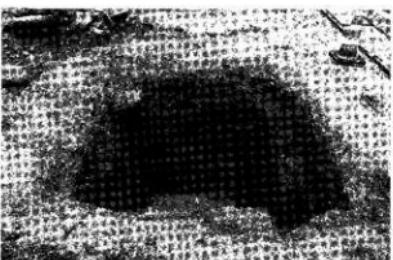
4. 立川遺跡 調査地近景（東から）



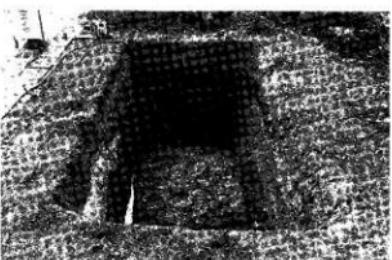
5. 同 トレンチ1（北から）



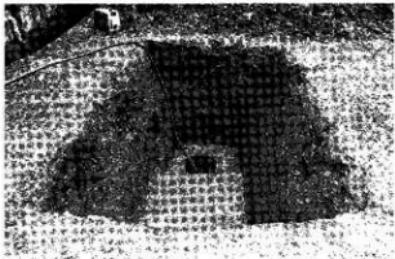
6. 同 トレンチ2（北東から）



7. 同 トレンチ3（東から）



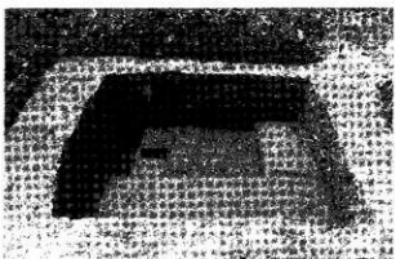
8. 同 トレンチ4（東から）



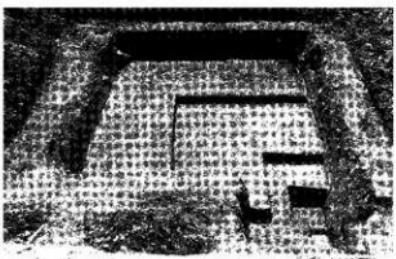
1. 立川遺跡 トレンチ5（南から）



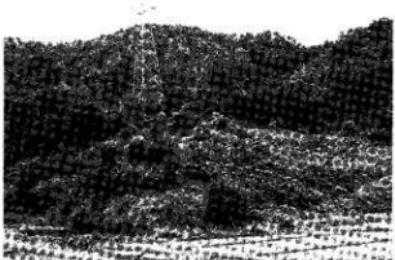
2. 覚寺第2遺跡 調査地遠景（南西から）



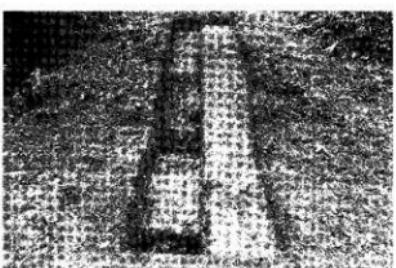
3. 同 トレンチ1（北東から）



4. 同 トレンチ2（北東から）



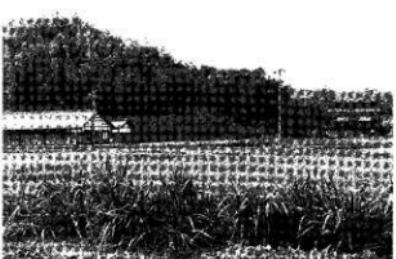
5. 宇倍野山古墳群 調査地遠景（北西から）



6. 同 トレンチ1（北西から）



7. 同 トレンチ2（北西から）



8. 桂見遺跡群 調査地遠景（東から）

図版 4



1. 桂見遺跡群景 トレンチ1（北東から）



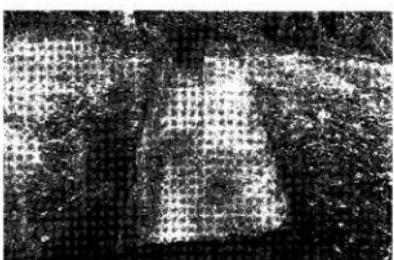
2. 同 トレンチ2（東から）



3. 同 トレンチ3（北西から）



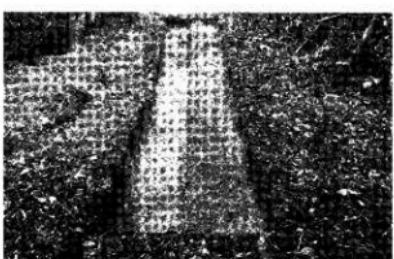
4. 同 トレンチ4（南西から）



5. 同 トレンチ5（北から）



6. 同 トレンチ6（北東から）

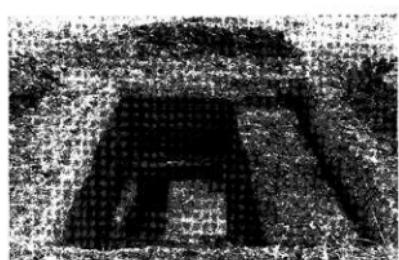
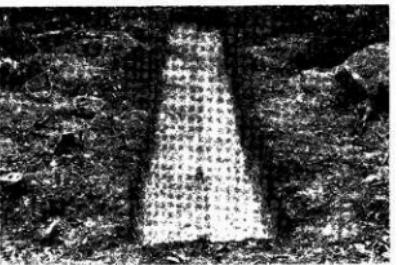
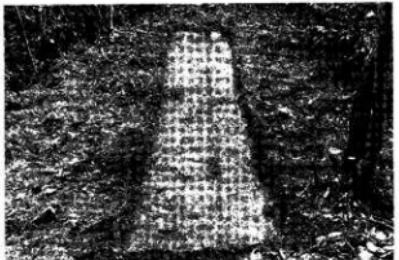


7. 同 トレンチ7（東から）



8. 同 トレンチ8（東から）

図版 5



報告書抄録

ふりがな	へいせい10ねんど とottoりしないいせきはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	平成10年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書							
副書名	宮長竹ヶ鼻遺跡、古海遺跡、立川遺跡、覚寺第2遺跡、宇倍野山古墳群、桂見遺跡群							
卷次								
シリーズ号								
シリーズ番								
編著者名	福浜 隆志 平川 誠							
編集機関	鳥取市教育委員会							
所在地	〒680-0047 鳥取県鳥取市上魚町39 TEL 0857-22-8111(代)							
発行年月日	西暦1999年 3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
宮長竹ヶ鼻	鳥取市宮長	31201		35° 28' 19"	134° 13' 34"	19980414 ~ 19980417	53.84	流通関連施設建設
古海	鳥取市古海	31201		35° 29' 39"	134° 12' 42"	19980527 ~ 19980626	110.26	店舗建設
立川	鳥取市立川	31201		35° 29' 18"	134° 15' 5"	19980702 ~ 19981016	39.39	河川改修 道路拡幅
覚寺第2	鳥取市覚寺	31201		35° 31' 12"	134° 14' 11"	19980908 ~ 19980911	64.52	病院建設
宇倍野山	鳥取市滝山	31201		35° 29' 51"	134° 16' 33"	19980924 ~ 19980929	11.67	道路建設
桂見	鳥取市桂見	31201		35° 29' 36"	134° 10' 30"	19981030 ~ 19981217	183.73	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
宮長竹ヶ鼻	集落	古墳～中世		須恵器、瓦質土器 白磁	試掘調査として実施			
古海	集落	縄文～古代	土坑、ピット 溝状遺構	縄文土器 土師器、須恵器	試掘調査として実施			
立川	集落	古墳？			試掘調査として実施			
覚寺第2	集落	中世		陶器 木製品	試掘調査として実施			
宇倍野山	古墳	古墳	古墳		試掘調査として実施 古墳2基の所在を確認			
桂見	集落	古墳	水田跡	土師器皿 木製品	試掘調査として実施 古墳時代水田跡を確認			

平成10年度
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

平成11年3月 印刷・発行
編集・発行 鳥取市教育委員会
印刷所 株式会社 次谷印刷所
